
占い師アルシオネ

羽村奈留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

占い師アルシオネ

【Nコード】

N0795H

【作者名】

羽村奈留

【あらすじ】

登場人物、占い師アルシオネ、本日の占い希望者：加納。『犯罪が出てこないミステリー企画』投稿作品です。

第1話

東京都の山手線の真ん中辺りに占いの館ネメシスがある。

ペンシルビルと呼ばれる館の中は、いくつもの部屋があり、有名無名の占い師が、悩みを抱えて訪れる人々を占っていた。

その中に水晶占いをする女性がいた。名前はアルシオネ。

本物の水晶球なのかガラス玉なのかは不明。服装はドレスだったり着物だったり民族衣装だったりと日によって違う。ただ、どんな時でも首にスカーフを巻いている。顔も常に子姫の能面をつけているため美人かどうかは分からない。手も魔方陣が刺繍された手袋をしているため、肌の状態から年齢を推測する事もできなかった。

そんな得体の知れない女占い師アルシオネだったが、なぜか評判はよく、予約は常にいっぱいだった。

ある日の事。一人の中年男性がアルシオネの下を訪れた。名前を加納といった。

ビジネススーツに身を包んだ加納は、かなり落胆した表情をしていた。

話によると、事業で失敗し多額の借金を抱えているという。妻や子供たちの態度も冷たく、加納は将来の事が不安で相談に来たとアルシオネに言った。

アルシオネはさっそく水晶に手をかざして占いを始めた。

「加納さまの将来についてですか……」

加納の質問を繰り返して言うアルシオネの声は、ソプラノ歌手のように高めた。

子姫の能面をつけているからなのかもしれないが、表情の動きが分からない能面から出る声に、加納はアルシオネから不気味な雰囲気を感じて背筋をゾクツとさせた。

アルシオネは落ち着いた口調で言った。

「加納様の将来は、占いをするまでもなく、加納様も分かっています」

つしやると思いますが、やはり多額の借金を抱えていらつしやるので、借金返済を基準とした生活になると思います。それよりも、気になる事があります」

「気になる事とは？」

加納は身を乗り出した。今後、弊害になる事は減らしたい。前もって知っておいたほうがいいと思ったからだ。

「加納様のご家族についてです」

「私の家族が、ですか！？」

加納は驚いた。確かに今の家族は事業に失敗した自分に対して冷たい。しかし、子供たちは金をかけて塾に通わせただけあつてそれぞれに高学歴。一人は既に有名企業で働いている。妻は、内向的だが料理が趣味という良妻賢母。そんな家族にも、自分と同じ不幸が降りかかるというのだろうか。

加納はスーツの内ポケットからハンカチを取り出した。暑くもないのに汗が出てくるからだ。額に浮く油汗を拭いながらアルシオネに聞いた。

「あの、私の家族の気になる事というのは、なんでしょうか？」

アルシオネはずっと水晶に手をかざしていた。子姫の能面は水晶の中心部に向けられている。一体アルシオネには、何が見えているのだろうか。アルシオネは、静かに息を吐いてから言った。

「奥様が大切にされているブランドのバッグがあります。かなり古いもので、あちこちに傷もついております。水晶に映っている奥様と加納様は若く、ご結婚前かと思われます。そのバッグは、バーバリーのハンドバッグ。加納様が奥様にプレゼントをされて、数カ月後にご婚約されていらつしやるようです」

「確かに、結婚前にバーバリーのハンドバッグを妻に送っております。そのバッグはとも思い出があると言って、妻は今でも大切に保管しています」

加納は、そう答えながら占い師アルシオネの的中率に驚いていた。妻が大切に保管しているバーバリーのバッグは、当時の妻がとても

欲しがっていたもので、結婚を反対していた身内から内緒で購入し妻に贈っているため、この事実を知る者は妻しかいなかったからだ。

第2話

「そのバーバリーのハンドバッグですが……」

言ってから、アルシオネは言葉を止めてしまった。

なぜ言葉を止めてしまったのか。加納には理解ができなかった。

今まで、借金返済の地獄のような生活をなんとかしようと、加納はいろいろな占い師の下へ通った。その全ての占い師に共通している事は、占いが当たると有頂天になって占い師が多弁になるという事だ。しかし、アルシオネは違っていた。占いが当たったと知ったとたん、言葉を止めてしまったのだ。加納は、アルシオネが言おうとした言葉の先が気になった。

「バーバリーのハンドバッグがどうかしたのですか？　もしかして、妻は、私の借金の返済のために、バーバリーのハンドバッグを質に入れようとしているのですか？」

「いいえ。違います」

アルシオネの子姫の能面は水晶の表面に映り、水晶に映った子姫の黒い瞳は、加納の表情をじっと見ていた。

「むしろその逆で、奥様は、バーバリーのハンドバッグを手放す事を恐れていらっしゃいます。理由は、加納様ご購入されたハンドバッグではないからです」

「何！」

加納は椅子から立ち上がった。ハンカチを握り締める。

「そんなはずはない！　あのバーバリーのバッグは、私がイギリスのロンドンで買ったもので、今の日本では残存数が少なくて、かなり希少価値の高いものなんだぞ。私以外の誰か手に入れて妻に渡したというのだ。それに、バッグにつけている傷は昔から同じ場所にあるって、今も変わっていない。私は、あのバッグを昔から知っているんだぞ！」

加納がいきり立ち、手の中で熱くなっているハンカチを握り締め

ている今も、アルシオネの子姫の能面はずっと水晶を見続けていた。
「水晶に映っている事を申し上げますと、バーバリーのハンドバッグは、当時、複数ありました。奥様は同じハンドバッグをいくつかお持ちになっただけです。」「

「いくつか持っていた、だと!？」

「はい。奥様は、加納様とご結婚される少し前に、質屋で現金に変えるなどして、ご整理されていたようです」

加納は、椅子に座った。今まで自分に降りかかった不幸をどうかしようと、何人もの占い師の下へ通ってきた。その占いの結果は、当たっているものが少なく、その大半が分かり過ぎるほどに外れていた。加納は、目の前にいるアルシオネも的中率の低い占い師だと結論を出した。もうここに長居する必要はない。加納は、帰り際に似非占い師にいつもする質問を、アルシオネにもした。

「その水晶に、私の子供は、何人と出ておりますか？」

その質問の直後、アルシオネは、今まであげなかった顔をあげた。子姫の能面が始めて加納に向いた。

加納はドキッとした。アルシオネから感じたのは威圧感ではなかった。それは、子供の時に感じた死の恐怖。親戚の葬式の時に知った、誰にでも順番がめぐってくる、忍び寄る死の恐怖である。

加納は、急に冷えた空気を感じてうろたえるが、自分自身に間違いないのも事実なので、椅子に座り直して呼吸を整えてから気を取り直した。

第3話

アルシオネは、加納が椅子に座り直している時も、一度も水晶を見ようともしなかった。魔法陣がついている手袋をした手を下ろして膝に置いてから言った。

「現在の加納様に、実子はいらっしゃいません」

その答えを聞いて、加納は笑い出した。

「会社の経営が傾いてから、今までに、いろんな占い師の所に通ってきたが、子供がいなかったのは、あんたが初めてだ。先日、渡された紙に、生年月日や家族構成などを書き記したのだが、あんたはそれを読んでないのかな？」

「読ませて頂きました。読んでいるだけで、現在の加納様の不遇が水晶に映り、それを見た私は目頭が熱くなりました」

アルシオネは、子姫の能面の奥から加納の表情をじっと見続けながら続けて言った。

「加納様。すぐではございませんが、転機が訪れます。その転機により借金を全てご返済され、富を築かれます。ですが、遺産はご家族に分配されないほうがよいかと――」

アルシオネの言葉の途中で、加納はまた立ち上がった。

「あんたの占いは、もううんざりだ！」

子姫の能面は加納を見上げた。見上げただけで、何も言わない。

加納は、アルシオネを嘲りながら言った。

「今の私の家族は、確かに私に対して冷たい。それはだな、事業を失敗してショックを受けている私に、どう言葉をかけていいのかわからないからだ。なぜそれが分かるかって？ 妻と子供たちが私にそう言ったからだ。でもな、もう1つ付け加えて言ったんだ。何があっても、ずっと家族は一緒だと」

加納は、足元にあったスニーカーを掴んだ。

「そういう訳だ。ここには二度と来ん！ さよならだ」

加納は水晶の前に一万円札を一枚置いた。

「加納様。おつりを今お出し致しますので――」

アルシオネが机の下から金庫を取り出すが、加納はアルシオネに背を向けた。

「つりは、いらん！ 怒鳴った迷惑料だ。とっておいてくれ」

そう言つと、加納は部屋を出て行つた。

アルシオネの子姫の能面は、加納が出て行つた出口をずっと見つめていたが、しばらくしてから下を向いた。子姫の視線の先には、加納が置いていった一万円札がある。魔法陣が描かれた手袋は、その一万円札を掴むときちゃんと端を合わせて二つに折りたたんでから金庫の中に入れた。

占い。

その占いにより、出た結果は何を意味するのか。

人々は、当たりか外れかの二通りで判断する。

占いに人生を委ねる者。占いを信じない者。それも人それぞれ。

今回の占いの結果はどういう事なのか。全てを知るのはアルシオネのみである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0795h/>

占い師アルシオネ

2010年10月8日13時58分発行